

道路橋点検必携(平成27年版)

～橋梁点検に関する参考資料～

発売：平成27年4月



B6判 480頁

定価(本体2,500円+税)

ISBN 978-4-88950-274-9 C2051 ¥2500E

目次

1. はじめに
2. 関連法規と点検体系
3. 橋の種類や諸元
4. 近接目視の実施
5. 記録方法
6. 資料集
7. 参考資料

日本には、2015年1月時点で、70万橋程度の2m以上の道路橋が供用されています。その多くは戦後に建設されており、早い時期に建設された橋では既に供用後50年が経過するなど、膨大な数の既設道路橋の高齢化が着実に進んでいます。

道路橋は、そのほとんど全てが必要な性能が得られるよう時々の最新の知見と社会情勢を反映して改定が重ねられてきた統一的な技術基準によって造られてきています。しかし、一旦建設されると長く供用される道路橋に対して、交通条件などの道路橋をとりまく環境は変化していきます。また調査研究によって過去には知られていなかった劣化現象や損傷形態のあることが明らかになるなど、既設橋では建設当時には想定できなかった劣化や損傷の影響によって性能が低下してくるものもあります。さらに、日本では地震や台風などの自然災害によって道路橋が被害を生じることもあります。

このように様々な原因で劣化や異常を生じる道路橋に対して、適時の措置により通行機能の障害の発生を最小限に抑えるとともに、経年的な劣化事象に対して早期の異常や予徴の発見による予防保全の実現を図るためには、最新の状況を点検や調査により把握して健全性の診断などの的確な評価を行うことが極めて重要となります。

このような背景のもと、2014年には国土交通省令として「道路の維持・修繕に関する技術基準」が定められ、道路橋では必要な知識と技能を有する者が5年毎に近接目視による定期点検を行うことが義務づけられました。

ここで技術者による近接目視が必要とされた背景には、道路橋では致命的な影響を及ぼしかねない重大な異常を確実に発見し、かつそれが橋に及ぼす影響を的確に判断するためには、外観性状の詳細観察に加えて打音や触診を技術者自らが行うとともに、橋の構造や様々な劣化事象や損傷についての技術的知見を駆使して、緊急性の評価や原因の推定のほかにさらなる詳細調査の必要性の判断などを行うことが不可欠であることがあります。今のところ道路橋では、非常に小さな損傷であっても致命的な事故に繋がることもあるため、全ての部材に技術者自らが近接して診断を行うことが避けられません。

本書は、道路管理者をはじめ道路橋の点検に関わる業務を行う者が適切に業務を遂行するために知っておくことが有効と思われる情報を、現場に携行していつでも確認できることを目的にとりまとめたものです。

本書を常に携行あるいは、机上に常備して、参照することで読者の技術力の向上と道路橋の維持管理の質の向上につながることを期待しています。